

カンボジア、サンボー・プレイ・クック遺跡群 N1祠堂の 発掘調査：2016年 8 月

田畑幸嗣・小岩正樹・中川武・So Sokuntheary・成井至・
奥勇介・川上真那・横山未来・堀川洸太郎・辻角桃子

はじめに：サンボー・プレイ・クック遺跡群について

本稿は、早稲田大学とカンボジア文化芸術省によって2016年8月に実施された、カンボジア、サンボー・プレイ・クック遺跡群、ブラサート・サンボーの発掘調査報告である。

サンボー・プレイ・クック遺跡群は、カンボジア王国のほぼ中央部、コンポン・トム州プラサート・サンボー郡に所在する古代都市と寺院との複合遺跡群である（図1）。文献学的には、同遺跡群は『隋書』真臘伝や『大唐西域記』にみられる伊奢那城あるいは伊賞那補羅國、すなわち同遺跡群出土クメール刻文（K. 436、K. 438等）が示す古代都市イーシャーナプラ（Īśānapura）に比定されている。実在の遺跡出土刻文に記された都市（国）名と漢籍の表記とがほぼ完全に対応する、東南アジア古代史では数



図1 サンボー・プレイ・クック遺跡群の位置

少ない遺跡である。

地形学的には、サンボー・プレイ・クック遺跡群はトンレ・サップ川の支流であるセン川中流域に所在し、遺跡地一帯は、セン川の氾濫源と隣接する微高地からなる沖積平野である。この沖積平野は、後背湿地 (back marsh)、平野 (valley plain)、自然堤防 (natural levees)、曲流 (meander scrolls)、古河道 (abandoned channels)、水面 (water surface)、砂州 (sand bars) に区分され (Nagumo et.al., 2010, 2011)、都市区域、寺院区域とも、その大部は雨季でも冠水しない平野の微高地にあるが、都市区域のほうが寺院区域に比してやや標高が低い。都市区域の南東方にはボン・チー・カーイ (Boeung Chea Kay) と呼ばれる大きな湿地が広がる。セン川中流域の低地帯に一部みられる微高地に遺跡群が形成されているということになる。

遺跡群は、一辺約 2 km の土塁と環濠とに囲まれた都市区 (City Area)⁽¹⁾と、多数の煉瓦積祠堂からなる寺院区 (Temple Area) から構成されている (図 2)。都市区域のプランは矩形であるが、東側には土塁は存在せず、小河川オー・クル・ケー (O Krou Ke) が南流している。オー・クル・ケー川は遺跡群を都市区と寺院区とに二分するように南北に貫き、その南方でセン川の後背湿地に流れ出す。流量はさほど多くなく、乾季には一部干上がることもあるが、直行する幾筋かの堰堤らしき土手痕が認められ、これを堰き止めて貯水した痕跡が残されているとの報告もある (下田 2010 : 60)。一方、寺院区の東方を流れるセン川はトンレ・サップ川の支流であり、乾季にも干上がることはない。トンレ・サップ川はプノンペン近郊でメコン川と合流する。イーシャーナプラが都市 = 寺院群として機能していた当時、セン川が河川交通に大きな役割を果たし

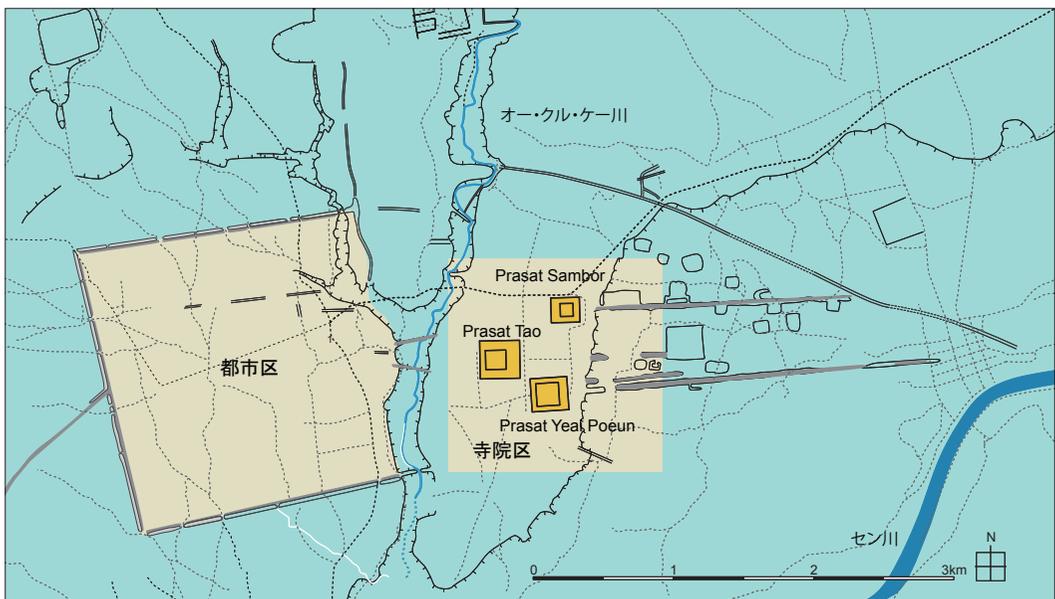


図 2 サンボー・プレイ・クック遺跡群全体図

ていたのだろう。トンレ・サップ川は雨季にはかなり水深が深くなり、たとえば海路でアンコールまで来ている元朝の使節は、現在のプノンペン北方約100kmの地点までは外洋船でメコン＝トンレ・サップ川を遡上している。内陸に位置しているイーシャーナプラではあるが、トンレ・サップ水系に接続していることから、海域ネットワークとはそれほど隔絶していなかったと考えられる。

寺院区は大きく、北グループ（中心寺院はプラサート・サンボー：Prasat Sambor）、中央グループ（中心寺院はプラサート・タオ：Prasat Tao）、南グループ（中心寺院はプラサート・イエイ・ポアン：Prasat Yeai Poeun）の祠堂群からなる。今回発掘調査を実施したプラサート・サンボーは、7世紀前半、イーシャーナヴァルマンI世の治世下に造営されたと考えられている。複数の祠堂や周壁、溜池などによって伽藍が構成されており、クメール建築にみられる複合伽藍構成としては最初期に位置づけられる寺院のひとつである。

1. 調査の目的

今回の調査は、1) 北グループ N1塔中央テラス周辺の遺構確認、2) 将来の保存整備に向けた基礎データ整備、を主な目的として実施した。サンボー・プレイ・クック遺跡群の各遺構は、遺跡保全と遺跡公園整備のために、樹木伐採と土砂除去がある程度は進んでいるが、遺跡の全体像が顕わにされているわけではなく、それは北グループでも同様である。そのため、今回は埋没遺構の確認調査を調査の主目的として設定した。古代クメール建築史上、最初期の複合寺院の一つとされる北グループの中心寺院の全体像を明らかにすることは、クメール物質文化の史的展開を研究する上で必要不可欠な調査である。さらに、出土遺物の内容の検討結果次第では、本遺跡群での編年的考察に寄与できる可能性がある。また、各遺構の歴史的価値を復元し、広く周知可能なものにするためには、建築当初の姿にできるだけ近く、さらにその後の増改築の過程が理解可能な形での復元整備が求められる。このため、発掘調査を通じ、建築学的、考古学的に建築物の崩落状況やこれに伴う遺物分布を明らかにし、今後の修復計画の基礎データを整備する必要がある。

2. 調査体制と調査日程

本発掘調査は、国際交流基金アジアセンター、アジア・文化創造協働助成に採択された事業である『カンボジア、サンボー・プレイ・クック遺跡群の保全に関わる人材育成』に伴いワークショップの一環として実施した。そのため、調査に際しては、建築学と考古学を専攻するカンボジア王立芸術大学、ノートン大学の学生を実習生として受け入れ、文化遺産調査保全に関する技能研修を行った。

実施体制は次の通りである。

調査団

中川武（早稲田大学名誉教授） 総括・建築学指導

田畑幸嗣（早稲田大学准教授） 考古学調査指導

小岩正樹（早稲田大学准教授） ワークショップ運営・建築学調査指導

ソ・ソクンテリー（So Sokuntheary）（ノートン大学教授） 建築学調査指導

調査参加学生

成井至、横山未来、辻角桃子、矢野菜奈子（早稲田大学）、Keb Vannita、Srey Sokuncharia、Vy Bora、Voeun Vibolsokhom、Eng Tola、Neang Sovandara、Phuy Meychean、San Mouyli（王立芸術大学） Khon Sereyvuth、Thor Samrach（以上ノートン大学）



写真1 調査風景

現地調査は2016年7月31日～8月13日の2週間、実施した。7月31日はワークショップ内容説明、8月7日は遺跡見学、8月13日は成果報告会であったため、調査作業はこれらを除いた期間で行っている。8月1日～5日は全日発掘作業を行い、8月6日以降は午前中に発掘、午後は室内での整理作業を行った。

7月31日 : 参加者集合、ワークショップ内容説明

8月1日 : 調査区設定

2日～5日 : 掘削、写真記録

6日 : 掘削、写真記録、図面作業

7日 : 遺跡見学

8日～12日 : 掘削、写真記録、図面作業、室内整理作業

13日 : 成果報告会

3. 発掘調査の成果

調査区

サンボー・プレイ・クック遺跡群の北グループ中心寺院であるプラサート・サンボーは、主祠堂である N1 塔を中心に、中央テラス、内周壁、中周壁、外周壁、環濠が巡らされた複合伽藍である（写真 2、図 3）。

2004、05 年調査では、中央テラス北東隅で、中央テラスの周囲にテラス基部煉瓦敷き、さらにその周囲に別の煉瓦敷き⁽²⁾が検出されたことが報告されている（下田他 2006）。今回の発掘調査では、隣接地点である中央テラス東縁辺部を調査地として選定し、遺構の状況を確認することとした。

中央テラス東面中央階段から北側へ向けて調査区を設定した。調査区は南北 8 m、東西 8 m、総面積 64m²である。出土遺物、検出遺構の記録であるが、トータル・ステーションの手配が難しかったため、XY 座標はグリッド線からメジャー・テープで計測し、オート・レベルで標高を計測した。座標系は、N1 祠堂東西軸（Y 軸）と南北軸（X 軸）の交点（ヨニ台座内）を原点とする任意座標系を採用している。標高については、X：0、Y：5（東側開口部）を BM0 としている。



写真 2 プラサート・サンボー俯瞰写真

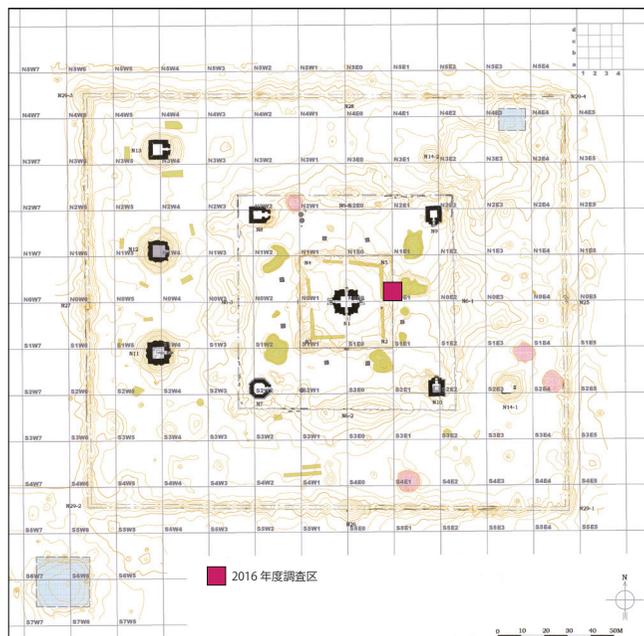


図 3 プラサート・サンボー平面図

調査経過

調査は中央テラス及びその周辺部の煉瓦敷きあるいは砂岩敷き遺構面の検出を目指し、掘削を進めた。調査区西半部では表土（Ⅰ層）を15～40cm取り除いた段階で中央テラス上面の煉瓦敷きを検出している。調査区東半部では表土（Ⅰ層）を8～40cm取り除いた段階で中央テラスの崩落土（Ⅱ-a層）が認められた。その後東半部ではさらに掘削を進め、中央テラス周縁部より東へ1.92mの幅でテラス基部煉瓦敷きを検出し、調査区南側では柱穴状遺構を4基確認できた。これらと同時に、更に東側ではほぼ同一レベルで崩落土もしくは堆積土（Ⅱ-b、Ⅲ層）が認められ、これを取り除いた結果、階段状煉瓦敷きと、下部煉瓦敷きが発見された。

検出遺構（図4）

今回の調査区では中央テラス、柱穴状遺構4基、テラス基部、階段状の煉瓦敷き、下部煉瓦敷きを検出している。中央テラスは一部で煉瓦敷きの崩落が確認できるものの、他は良好な遺存状態を保っている。検出したそれぞれの遺構は、年代推定に寄与する良好な遺物が出土しておらず、年代について窺い知ることは難しい。

中央テラス

当該域に堆積していた表土（Ⅰ層）および、散乱煉瓦を除去したところ、中央テラスの平面形状が明らかとなった。中央テラスは調査区北辺から南へ4.40mの地点で東へ0.4m折れ、そこからさらに南へ折れることで中央階段部側壁に接続する。

テラス基部煉瓦敷きの上面から中央テラス上面煉瓦敷きまでの高低差は、北壁セクションにおいておよそ1.04mをはかる。テラス上面は土砂や煉瓦片が堆積しているが、2002年のN1塔北西隅北傍の発掘調査では一部に当初の床材とされる砂岩の板材が確認されており、本発掘調査区における中央テラスも一面砂岩敷きであった可能性が想定される。したがって、本来の中央テラスの高さは1.04mより高いものであったことが理解される。

柱穴

本発掘調査では、中央テラス東縁辺部中央階段の北側で柱穴と考えられる遺構を4基（a・b・c・d）検出している。これらはいずれも直径約0.5mで、平面計は崩れた円形である。東西方向の2基（a-b、c-d）でセット関係をなすとみられることから、柱穴列がN1中心軸に沿って内側と外側の2列存在する。過去の調査でも、今回検出されたものとはほぼ対称の位置に柱穴4基が検出されていることから、木造構造物があったことは明らかであるが、瓦が出土していないことから、板葺きの可能性も考えられる。

このことから、この柱穴をとまなう構築物は、二重の柱を持つと考えるよりは、一度改築され

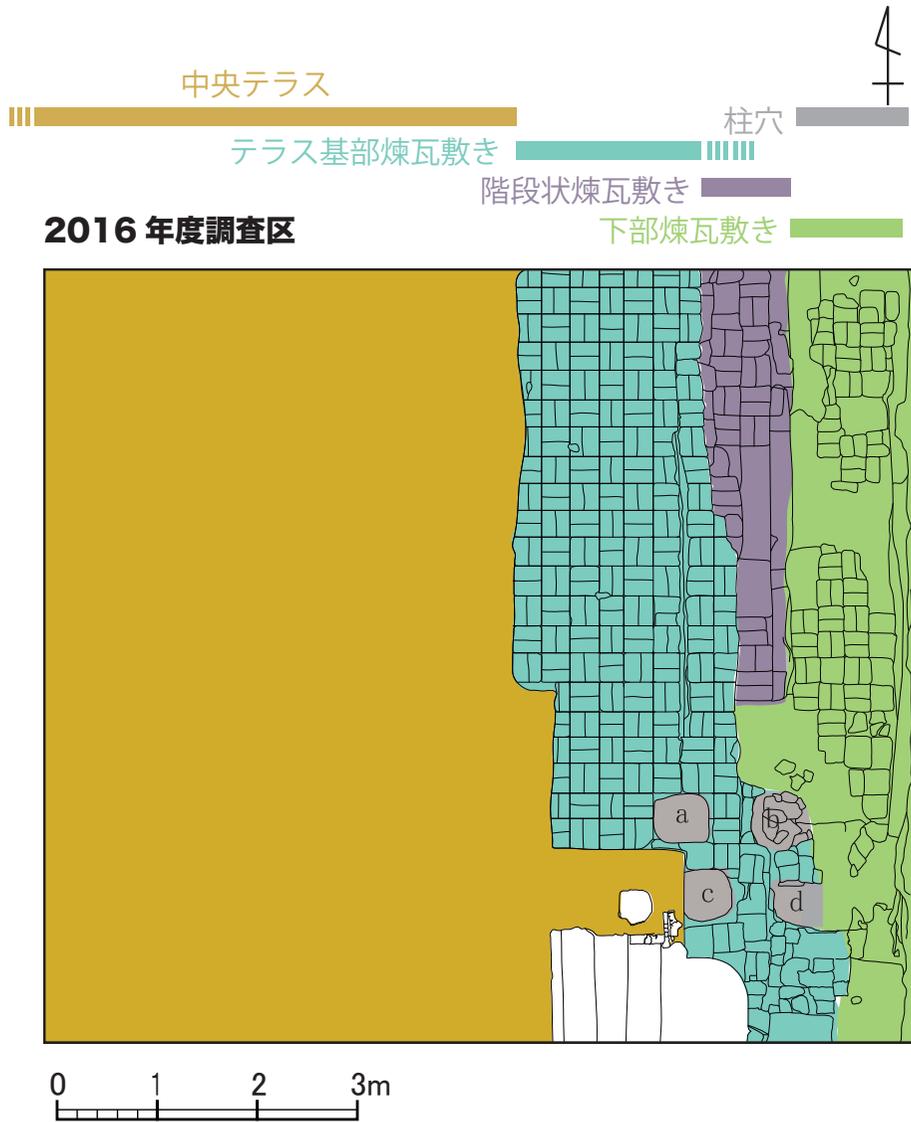


図4 検出遺構

ていると考えたほうが良いだろう。

本発掘調査で検出されたこれら4基の柱穴状遺構のうち西側の2基（a、c）はテラス基部煉瓦敷き上面から切り込んでおり、時期的にテラス基部構築後のものであることが理解できる。ただ、内側と外側の柱穴列の新旧関係は明らかでない。中央テラス南面・西面の中央階段周辺ではこのような柱穴は確認されていないことから、正面である東側にのみ設けられており、おそらく東参道から接続するものであったのであろう。



写真3 検出遺構（南から）



写真4 検出遺構（東から）



写真5 検出遺構（北から）

テラス基部

中央テラスの周囲には、東側で煉瓦敷きの床面を検出している。後述する下部煉瓦敷きと比較すると煉瓦4層分ほど高く持ち上げられており、テラス基部に相応する構造であると理解できる。今回の調査区内ではこのテラス基部煉瓦敷きは大きく崩壊することなく非常に良好な状態で検出されている。中央テラス東縁辺部中央階段を挟んで南側においても過去にテラス基部の煉瓦敷きが非常に良好な状態で検出されており、テラス基部は中央テラス東面での遺存状態が良いことがわかる。

テラス基部は、中央テラス東面縁辺部より東へ、北壁セクションにおいて1.92m 張り出していることが確認できた。中央テラス北東部では約2.1m 幅で張り出しているとされ（下田他 2006）、この結果と概ね一致することから、テラス基部は2m 前後の幅をもって形成されていることが理解できる。

階段状煉瓦敷き

テラス基部と下部煉瓦敷きの間で階段状に煉瓦敷きを3段検出している。調査区北辺から南へ4.4m あり、幅は北壁セクションで上段28.0cm、中段32.0cm、下段19.0cm である。この範囲以外では西・南・東面のいずれにおいても検出されていないため、テラス基部の煉瓦敷き上面が剥が

れ落ちている可能性も考えられる。今回は便宜上、階段状煉瓦敷きとして報告し、その性格や遺構認定の妥当性については、今後の周辺の調査成果を踏まえ、改めて検討したい。

下部煉瓦敷き

断面図には記載していないが、調査区東辺から西へ0.8m幅で検出している。この西隣は階段状煉瓦敷きを経てテラス基部に接続する。部分的に崩れている箇所もあり、テラス基部との煉瓦敷きパターンの違いは見極められていない。

層位と遺物分布（写真6、図5）

層位

本発掘調査では調査区北壁において、層序記録を行った。層序は4層からなり、上層から、I層（崩落煉瓦を多く含む粘土質の自然堆積土層）、II-a層（多量の崩落煉瓦を含む堆積層）、II-b層（小さな煉瓦ブロックをやや多めに含む堆積層）、III層（シルト質の堆積層）となる。

I層：崩落煉瓦を多く含む粘土質の自然堆積土層

N1塔伽藍全体の上層に認められる。堆積層の厚さは、10～50cmと場所によって差がある。暗褐色粘質土で、土壤化が進んでいる。また、中央テラスの外側に崩落煉瓦を多量に含む。



写真6 調査区北壁土層堆積状況

II-a 層：多量の崩落煉瓦を含む堆積層

中央テラス縁辺部から調査区東端まで確認された。堆積層の厚さは、約40cm で、明褐色のシルト質土である。I 層同様、崩落煉瓦を多量に含む。

II-b 層：小さな煉瓦ブロックをやや多めに含む堆積層

下部煉瓦敷き上で確認された。明褐色のシルト質土で、II-a 層ほど顕著ではないが、小さな煉瓦ブロックをやや多めに含む。

III層：シルト質の堆積層

褐色のシルト質土で、階段状煉瓦敷き上で確認された。堆積層の厚さは、厚いところで約30cm ある。

遺物分布（図6）

遺物の分布状況を分析することは、土層崩落の方向やその相対時期を理解し得ると同時に、崩落土層・遺物の原位置を考える上で重要な事項である。本稿においても、N1塔周辺部の建築当初の状況を将来的に復元するために、出土遺物の分布状況について記したい。

しかしながら、本発掘調査区は南北8m、東西8mと広範囲でありながら、セクションベルトを設けず、断面図は北壁でのみ作成しているため、調査区内における各層の堆積量の変化や傾斜を確認し再現することができない。北壁セクションにおさまる遺物を抽出して分布図を作成しているが、ここで示す分布図が本発掘調査区における遺物分布状況を正確に反映しているとは言い難い。このことを十分に理解した上で分布状況について概観したい。

本発掘調査での出土遺物は総数344点に及ぶ。これらの詳細については出土遺物の章を参照されたい。遺物は北壁セクション I 層～III層すべてで出土している。その分布状況からは、①調査区東半部での遺物の集中、②II-a 層と III層の原位置の相違、③II-a・III層と II-b 層の性格の相違が捉えられる。

① 調査区東半部での遺物の集中

調査区東辺から西へ約4.0m の地点に中央テラスの東縁辺部を認められる。ここを境に西側では遺物1点であるのに対し、東側では数多く確認できる。セクションをみると、調査区東辺から西へ3.6m～4.1m の範囲で中央テラス上面からの崩落煉瓦を認められ、土層（II-a 層）は中央テラス上からテラス基部以东へ流れ込んでいることが考えられる。このことから、調査区東半部で出土している遺物の多くは中央テラス上面から土層とともに流れ込んでいる可能性がうかがえる。

② II-a 層と III層の原位置の相違

北壁セクションをみると、II-a 層と III層は西から東へ流れ込んで堆積していることがうかがえる。II-a 層は中央テラス東縁辺部から調査区東辺まで認められ、これが少なからず中央テラス上から流れ込んでいることがわかる。一方で III層はテラス基部東辺から下部煉瓦敷き西辺の間での

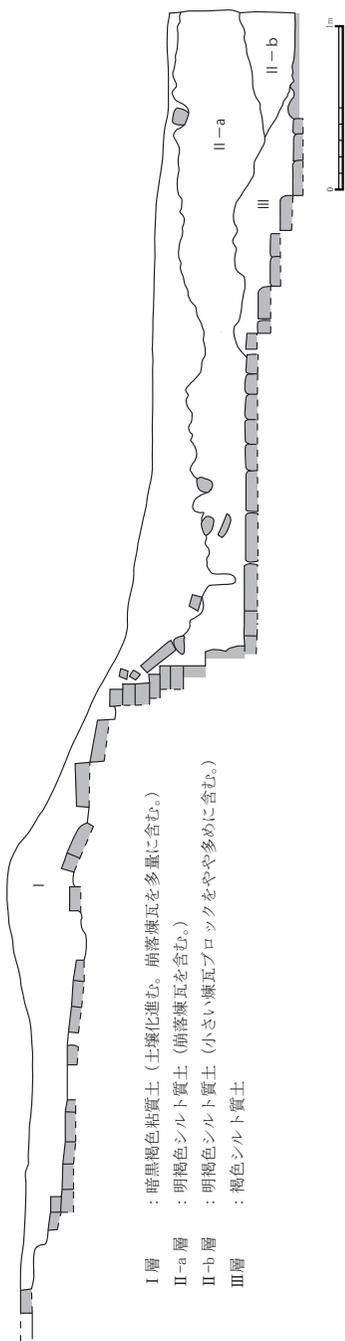


図5 北壁セクション (S=1/40)



図6 北壁遺物分布図 (S=1/40)

み認められ、階段状煉瓦敷きに堆積していることからこれはテラス基部上から流れ込んでいることがうかがえる。つまり、Ⅱ-a層の原位置は中央テラス上面、Ⅲ層の原位置はテラス基部上面と推測でき、それぞれの土層に含まれる遺物もこれらの場所から流れ込んでいることが考えられる。

③ Ⅱ-a・Ⅲ層とⅡ-b層の性格の相違

Ⅱ-a層とⅡ-b層は土層の性格上大きく違うことはないが、遺物分布をみると、Ⅱ-b層内では遺物あまりみられないのに対して、Ⅱ-a層のⅡ-b層直上部分では遺物の分布が認められる。このことから、Ⅱ-b層が堆積した後、遺物を多量に含むⅡ-a層が中央テラス上面から流れ込んできたことが考えられる。Ⅱ-b層はⅢ層の上に堆積しており、テラス基部上からの崩落土でないことがわかる。また、中央テラスからも離れた地点で堆積しており、中央テラス上からの崩落土とも考えられない。このことから、Ⅱ-b層は下部煉瓦敷き上に自然堆積したものであり、そこに含まれる遺物も西側から流れ込んできたものでないことがうかがえる。

但し、本遺跡では、以前クリアランス調査として、中央テラスでの堆積層を除去している。残念ながらクリアランス調査時での中央テラス土層堆積状況が不明なため、本遺跡における層位層序に関わる問題は、あくまでも仮説の域を出ず、今後遺跡全体の堆積状況を明らかにするなかで、改めて検討する必要がある。

出土遺物

本遺跡群における遺物に関しては、菅澤が都市区を対象に、嶋本及びメンホンが寺院区を対象に資料を提示・報告している（嶋本 2009、菅澤 2014、メンホン 2015）。今回の発掘調査は同遺跡群寺院区 N1塔中央テラスで行われたものであり、寺院区双方における遺物の全容を明らかにするための重要な一歩と捉えられる。

本発掘調査で出土した遺物は、土器、クメール陶器、中国陶磁器であり、石製品や鉄製品といったものはみられない。出土遺物の総数は344点であり、内訳は土器292点（84.9%）、灰釉陶器2点（0.6%）、黒褐釉陶器17点（4.9%）、無釉陶器26点（7.6%）、中国陶磁器7点（2.0%）である。

北壁セクションにおいて出土層位が判別できる遺物を抽出し、層位別にその割合をみると以下のようなになる。

- I 層：総数26点 一土器20点（76.9%）、黒褐釉陶器1点（3.8%）、無釉陶器5点（19.2%）
- Ⅱ-a層：総数136点 一土器119点（87.5%）、黒褐釉陶器8点（5.9%）、無釉陶器7点（5.1%）、中国陶磁器2点（1.5%）
- Ⅱ-b層：総数20点 一土器17点（85.0%）、黒褐釉陶器1点（5.0%）、無釉陶器2点（10.0%）
- Ⅲ層：総数68点 一土器59点（86.8%）、黒褐釉陶器1点（1.5%）、無釉陶器6点（8.8%）、中国陶磁器2点（2.9%）

いずれの層位においても、土器の割合が圧倒的に多いことがわかる。これらのうち、図化し得

た遺物は28点あり、大半はクメールの土器である。完形品はなくすべて全形を知り得ない破片資料である。しかし、特にクメールの土器は口縁部片の実測資料が一定量みられ、各器種の口縁形態を把握するための基礎資料として位置づけられる。

土器

(1) 各層位の出土土器

I層 (図7)

1は土器の壺(口縁部)である。反転復元で口径は16.0cmある。口縁端部は玉縁状を呈し、わずかに垂下する。内外面にヨコナデ調整が確認できる。

2は土器(あるいは無釉陶器)の大型鉢(底部)である。反転復元で底径は17.0cmある。底部と胴部の境は若干丸味を帯びる。

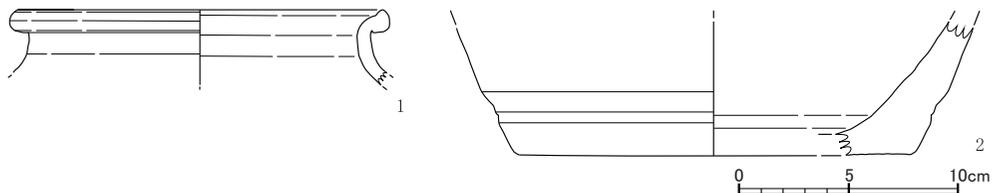


図7 I層出土土器 (S=1/3)

II-a層 (図8)

3は土器の壺(口縁部)である。反転復元で口径は18.8cmある。口縁部は垂直にのび、玉縁状を呈する。内外面にヨコナデ調整が確認できる。

4は土器の壺(口縁部)である。反転復元で口径は7.2cmある。口縁端部は玉縁状を呈し、わずかに垂下する。内面にヨコナデ調整が確認できる。

5は土器の壺(口縁部)である。口縁部は内傾し、端部はわずかに外へ肥厚する。

6は土器の器種不明品(底部)である。ただし、底面形状が湾曲していることから、あるいは他部位の破片である可能性も否定できない。底部と胴部の境は丸味を帯び、わずかに屈曲する。

7は土器の壺(口縁部)である。反転復元で口径は14.0cmある。口縁端部は玉縁状を呈し、わずかに垂下する。内面にヨコナデ調整が確認できる。

8は土器の広口壺(口縁部)である。反転復元で口径は13.6cmある。口縁部は大きく外反し、端部は玉縁状を呈し、垂下する。内面にはわずかにヨコナデ調整が確認できる。

9は土器の器種不明品(底部)である。器壁は厚さが底面で2mm、胴部下位で4mmと、他の実測土器資料に比べ極めて薄い。底部と胴部の境は外に開きつつ丸味を帯びる。

10は土器の大型壺(口縁部)である。反転復元で口径は40.4cmある。口縁端部は水平に外反し、

端部は角形を呈する。肩部に沈線が3条めぐる。また、頸部に赤彩（彩色）を施す。

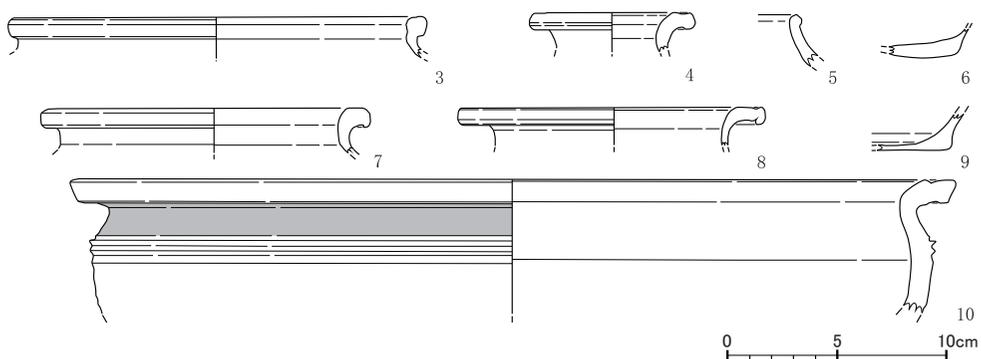


図8 II-a層出土土器 (S=1/3)

II-b層 (図9)

11は土器の壺（口縁部）である。反転復元で口径は16.0cmある。口縁部は内傾しつつ外湾し、端部が肥厚する。

12は土器の器種不明品（底部）である。底部と胴部の境は明瞭な稜を成す。

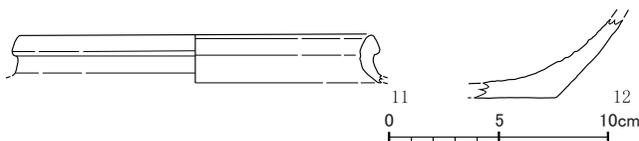


図9 II-b層出土土器 (S=1/3)

III層 (図10)

13は土器の壺（肩部）である。外面に沈線2条と連続刺突文が確認できる。

14は土器の壺（口縁部）である。反転復元で口径は13.2cmあるが、口縁部残存度が1/8以下であり、やや不正確である可能性がある。口縁端部は玉縁状を呈する。

15は土器の壺（口縁部）と推定されるが、形状からして高台部である可能性も否定できない。端部に沈線が2条程度めぐる。

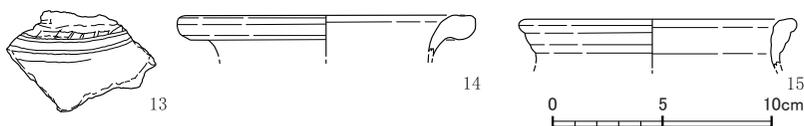


図10 III層出土土器 (S=1/3)

出土地点・層位不詳（図11）

16は土器の大型鉢（口縁部）である。反転復元で口径は29.0cm あるが、やや不正確である可能性がある。口縁部はわずかに有段状を呈する。口縁端部には沈線が1条めぐる。

17は土器の大型壺（口縁部）である。反転復元で口径は31.6cm あるが、口縁部残存度が1/8以下であり、やや不正確である可能性がある。口縁端部は外へ角形に肥厚する。口縁端部には沈線が2～3条めぐる。

18は土器の壺（口縁部）である。反転復元で口径は13.4cm ある。口縁端部は玉縁状を呈する。外面口縁下にスス状のものの付着が確認できる。内外面とも器表面は灰黄色～灰白色の化粧土が施されているとみられる。

19は土器の器種不明品（底部）である。底部と胴部の境は丸味を帯び、外面ラインは底部から垂直に伸びた後、外反して胴部に接続する。

20は土器の大型鉢（口縁部）である。反転復元で口径は23.0cm あるが、口縁部残存度が1/8以下であり、やや不正確である可能性がある。口縁部はわずかに内湾する。

21は土器の大型鉢（底部）である。反転復元で底径は16.0cm ある。底部と胴部の境は、丸味を帯びる。外面には沈線が3条めぐる。

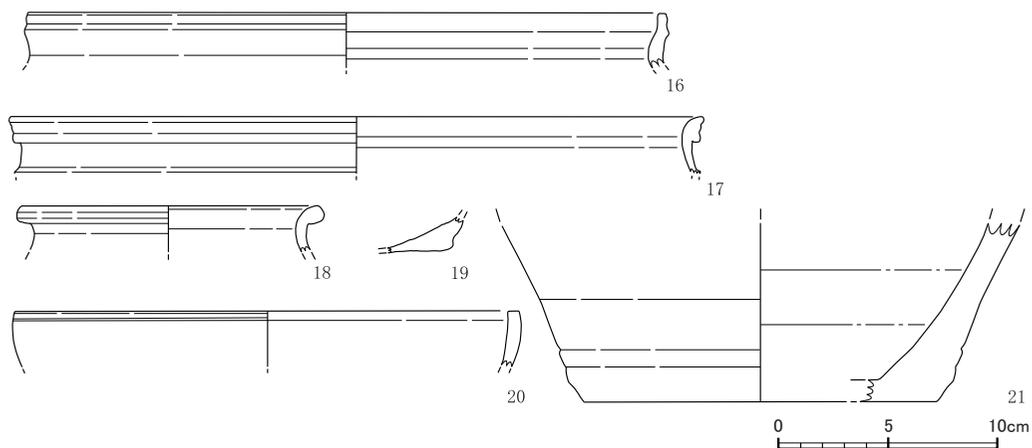


図11 出土地点・層位不詳土器（S=1/3）

(2) 精製土器と粗製土器（写真7、8）

本遺跡群出土土器には従来、「胎土・焼成の状態」「器壁の厚み」「文様の種類」など土器の総合的特質を観察した際に、「精製土器」と「粗製土器」の2種類を確認できることが知られている⁽³⁾（グロリエ 1998、嶋本 2009、菅澤 2014）。

今回のN1塔出土遺物に関しても両者の存在を確認できる。10は大型ではあるが、胎土が緻密で、

かつ赤彩が施されていることから精製土器に位置づけられよう。一方、13をみると胎土が粗く、彩度が低い。また、沈線や連続刺突文といった一種の刻文が施されており、粗製土器に位置づけられよう。



写真7 精製土器 (No.10)



写真8 粗製土器 (No.13)

しかし、精製土器と粗製土器の識別には明確な基準が設けられているわけではなく、その客観性が重要な課題となっている。今回の出土土器は、①多くが小破片であり、正確な実測が可能な口径・底径残存度1/8以上の資料が数点しかないこと、②崩落土層中に多くの土器が帰属し、器表面の磨滅が著しく、調整痕が残る資料が数点しかないことが要因で、精製・粗製の識別がより困難になっているため、これを分類せず整理している。

(3) 器種分類

壺・甕 (図12)

胴部から口縁部につながる過程で頸部がすぼまり、広口壺を除き基本的には口径が胴部最大径を上回らないと考えられるものである。口縁部が内傾し直線的にのびるような形態のものは確認できず、頸部がすぼまり口縁部が外反するもののみ確認できた。

大型のものは口径が30~40cm程あるが、器壁は1cm以下と薄い(10・17)。他は中型のものとみえ、口径が7~19cm程あり、器壁は2~6mm程と薄い。ただ、大型・中型壺ともに従来示されてきた資料より、口径が大きく、器壁が薄い傾向にある。

壺の口縁部形態は、以下の6形態に分類可能である。

- 頸部から緩やかに外反し、玉縁状口縁を呈するもの(1、4、7、14、18)。
- 口縁部は大きく水平に外反し、玉縁状口縁の下部が垂下するもの(8)。広口壺。
- 口縁部が水平に外反し、端部が角形を呈するもの(10)。
- 口頸部が内傾しつつ外湾し、口縁端部が肥厚するもの(11)。
- 口頸部が緩やかに外湾し、口縁端部は外へ角形に肥厚する(17)。
- 口頸部が内傾しつつ直線的にのび、口縁端部はわずかに外へ肥厚する(5)。

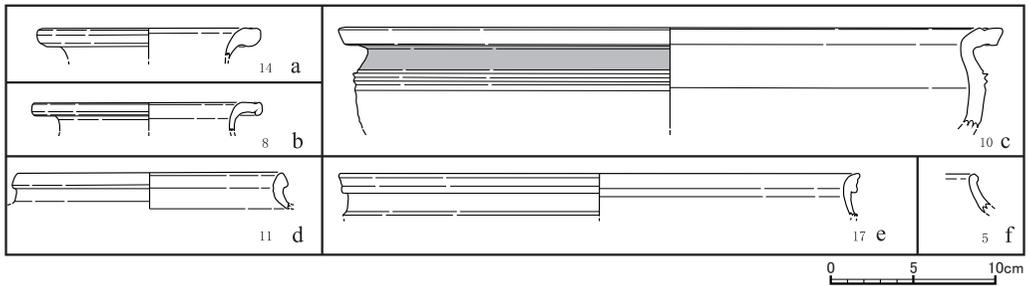


図12 壺・甕の口縁部形態分類

上記分類は、口縁端部断面形態から玉縁状 (a・b)、角形 (c・d・e)、他 (f) に大別分類が可能である。主体的にみられるのは頸部から緩やかに外反する玉縁状口縁 (a) の中型壺である。菅澤 (2014) で示されている都市区出土土器では、精製壺では頸部から緩やかに外反し端部が下方へ折れる資料、粗製土器ではくの字状口縁を呈し口唇部が肥厚する資料が主体的であった。今回の N1 出土資料ではこれに特徴が類似する資料は確認できない。また、口縁端部が従来提示されている資料に比べ、極めて明瞭な玉縁状を呈している。

鉢 (図13)

壺に比べ器高が低くなるものであるが、今回の出土資料は口縁部・底部破片資料が多く、器高を知り得ない。そこで頸部の形成が甘く、もしくは形成されていないもので、口縁部がわずかに内湾するもの、わずかに有段状を呈しつつ垂直に立ち上がるものを鉢として分類している。口唇部は四角くなる特徴がある。口径は23~29cm あり、器壁は6mm と薄い。

鉢の口縁部形態は、以下の2形態に分類可能である。

- a. わずかに内湾し、口唇部が四角くなるもの (20)。
- b. わずかに有段状を呈し、口唇部が四角くなるもの (16)。

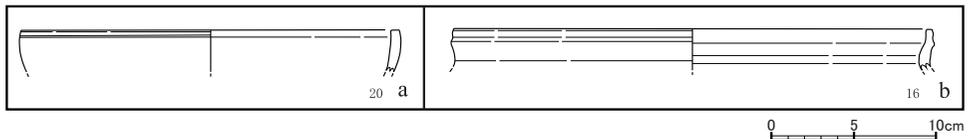


図13 鉢の口縁部形態分類

こういった口唇部が四角くなる形態は、菅澤 (2014) においても紹介されているが、今回の資料は器壁が薄い点で特徴的である。また、口縁部がわずかに有段状をなす形態に関して鉢に含めているが、先行研究では認められず、壺である可能性も含めて検討する必要がある資料と言える。

鉢の底部形態は先行研究からは見出せないが、今回の資料 (2・21) を見ると高台をもたない

平底で、底部付近に沈線をめぐらすことがわかる。ただ、これらは無釉陶器である可能性もあり、かつ壺であることも十分考えられるため、ここでは鉢に分類したが検討の余地がある。

クメール陶器 (図14)

灰釉陶器 (22) と黒褐釉陶器 (23・24) の両者が出土しているが、黒褐釉陶器にいたっては図面化し得ている資料が底部片のみである。22・23は出土層位不明で、24は表採品である。

22は灰釉陶器の瓶 (口縁部) である。反転復元で口径は9.6cm ある。沈線が口縁端部に1条、口縁部に2条めぐる。釉は淡緑色で、内外面に施釉する。

23は黒褐釉陶器の鉢 (底部) である。反転復元で底径は6.2cm ある。底部と胴部の境は明瞭な稜を成す。胴部下位に沈線が4条めぐる。釉は濃緑色で、外面に施釉する。

24は黒褐釉陶器の大型鉢 (底部) である。反転復元で底径は15.8cm ある。外面には沈線が1条めぐる。釉は全体的に剥落している。

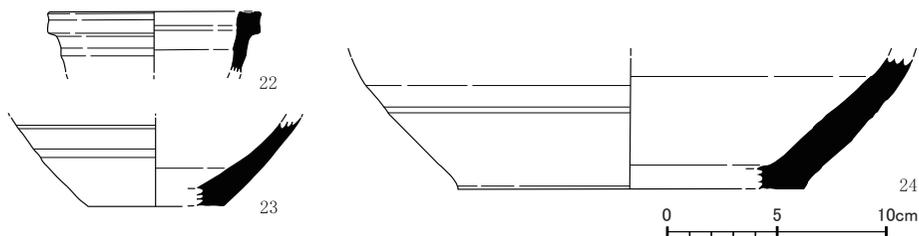


図14 クメール陶器 (S=1/3)

中国陶磁器

下記資料はいずれも小破片であり、生産地や年代について言及することは難しい。

ただ、本遺跡群出土の中国陶磁器に関しては、グロリエ発掘調査出土品が嶋本他 (2008) で年代推定されている。グロリエ発掘調査出土品では白磁・青白磁の合子は11世紀後半～14世紀代におさまるとされるが、本発掘調査で出土した白磁・青白磁の合子類も左記の時期におさまる可能性がある。

出土層位は、25が攪乱層、26がⅡ-a層、27・28がⅢ層である。

25は白磁合子身である。反転復元で底径は13.6cm ある。受部先端は欠損している。外面には蓮弁文と考えられる文様が認められる。

26は青白磁の合子蓋 (口縁部) である。復元推定口径は20.0cm であるが、口縁部残存度が1/8 以下であり、やや不正確である可能性がある。口縁部内面は釉のふき取りを確認できる。外面には渦巻文のようなものが確認できるが、不明瞭である。

27・28は白磁もしくは青白磁の器種不明品 (胴部) である。27には釉には貫入が多く入る。

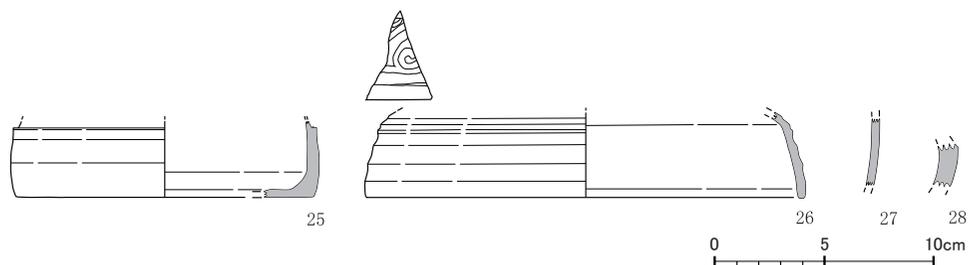


図15 白磁・青白磁 (S=1/3)

表1 遺物観察表

図版	出土層位	種類	器種	部位	釉薬			胎土			焼成	備考
					種類	軸調	施釉範囲	色調	マンセル	粒子		
1	I層	土器	壺	口縁部				浅黄橙	Hue10YR 8/4	粗い	良好	
2	I層	土器?	大型鉢	底部				橙	Hue7.5YR 6/6	粗い	良好	あるいは無釉陶器か。
3	II-a層	土器	壺	口縁部				にふい黄橙	Hue10YR 6/5	細かい	良好	
4	II-a層	土器	壺	口縁部				にふい橙	Hue7.5YR 7/4	細かい	良好	
5	II-a層	土器	壺	口縁部				黄褐	Hue10YR 5/6	—	良好?	
6	II-a層	土器	不明	底部				明黄褐	Hue10YR 6/6	粗い	良好	
7	II-a層	土器	壺	口縁部				にふい橙	Hue7.5YR 6/4	細かい	良好	
8	II-a層	土器	広口壺	口縁部				明赤褐	Hue2.5YR 5/8	細かい	良好	
9	II-a層	土器	不明	底部				黄橙	Hue7.5YR 8/8	細かい	良好	
10	II-a層	土器	大型壺	口縁部				橙	Hue5YR 7/6	粗い	良好	肩部に沈線3条。口縁下に赤彩。
11	II-b層	土器	壺	口縁部				明褐	Hue7.5YR 5/8	細かい	良好	
12	II-b層	土器	不明	底部				にふい橙	Hue7.5YR 7/4	細かい	良好	
13	III層	土器	壺?	肩部				にふい橙	Hue7.5YR 7/3	粗い	良好	沈線2条と連続刺突文
14	III層	土器	壺	口縁部				にふい黄橙	Hue10YR 7/4	粗い	良好	
15	III層	土器	壺	口縁部				橙	Hue5YR 7/6	粗い	良好	沈線2条程度
16	不明	土器	大型鉢	口縁部				明褐	Hue7.5YR 5/8	粗い	良好	
17	不明	土器	大型壺	口縁部				浅黄褐	Hue7.5YR 8/3	細かい	良好	口縁部に沈線2~3条
18	不明	土器	壺	口縁部				にふい橙	Hue7.5YR 7/4	細かい	良好 (硬質)	内外面とも器表面は灰黄~灰白色の化粧土?
19	不明	土器	不明	底部				橙	Hue7.5YR 6/8	粗い	良好	
20	不明	土器	大型鉢	口縁部				にふい黄橙	Hue10YR 7/4	細かい	良好	
21	不明	土器	大型鉢	底部				橙	Hue5YR 7/6	細かい	良好	沈線3条
22	不明	陶器	瓶	口縁部	灰釉	淡緑	内外面	—	—	細かい	良好 (硬質)	沈線3条
23	不明	陶器	鉢	底部	黒褐釉	濃緑	外面	灰黄	Hue2.5Y 6/2	細かい	良好 (やや硬質)	沈線4条程度
24	地表面	陶器	大型鉢	底部	黒褐釉	—	—	赤灰	Hue2.5YR 4/1	細かい	良好 (やや硬質)	沈線1条
25	攪乱	白磁or 青白磁	合子身		—	—	底部外面以外	灰白	—	緻密	良好 (硬質)	蓮弁文
26	II-a層	白磁or 青白磁	合子蓋	口縁部	—	—	外面及び 体部内面	灰白?	—	緻密	良好 (硬質)	口縁部内面は釉ふき取り。 渦巻文?
27	III層	白磁or 青白磁	不明	胴部	—	灰白	内外面	—	—	緻密	良好 (硬質)	軸は貫入が多く入る。
28	III層	白磁or 青白磁	不明	胴部	—	—	内外面	—	—	緻密	良好 (硬質)	

まとめ

本稿では2016年8月に実施したN1塔中央テラス東面縁辺部での発掘調査成果について整理した。本発掘調査により、伽藍の構成要素となる建築構造を再確認できた他、中央テラス東面でのみ見られる柱穴列を検出し、出土遺物に関しては土器の壺に新たな口縁形態を確認することができた。

① 遺構

中央テラス東面縁辺部における建築構造は主に、中央テラス、テラス基部、下部煉瓦敷きで構成されることが再確認された。これらに加え、テラス基部と下部煉瓦敷きとの間には階段状煉瓦

敷きが検出されたが、これが建造当初から目的をもって構築されたものであるのか、当該域を改変する際に設けられたものであるのか、テラス基部上面の煉瓦敷きが剥がれ落ちて自然に形成されたものであるのかを明らかにするためには、図面上での詳しい建築学的検討と今後の継続調査が求められるだろう。

また、テラス東面中央階段の両脇には内側・外側の二種類の柱穴列がみられ、位置や柱間距離が異なることから、参道に沿って建造されていた木造構造物が一度改築されていることが理解できた。

② 層位と遺物分布

遺物分布の状況から、Ⅱ-a層とⅢ層は原位置が異なり、この両者に含まれる遺物もそれぞれ原位置が異なる可能性がうかがえた。それぞれの土層に含まれる遺物をみると、両者ともに玉縁状口縁土器（a類）を含んでおり、a類の中で明瞭な型式的差異が認められないことから、時期的な差異がほとんどないことが理解できる。また、Ⅱ-a層に含まれる土器の方が、より多様な口縁形態を含んでいるが、これは時期的差異ではなく、むしろN1塔に近い中央テラス上の方に多様な種類があるという地点間の差異であると認識する方が妥当と考えられる。よって、テラス基部と中央テラスとの間に建築上の大きな時期的差異はないことが想定される。

③ 遺物

出土遺物については、その大半が崩落土層中にあったことから図化し得ない小破片のものが多く、特に全形を知り得る資料はみられなかった。ただ、土器に関しては口縁部片が一定量みられ、これらの実測図を作成し得たことで、その形態的特徴を理解することができた。特に土器の壺は、口縁形態が本遺跡群で従来示されてきたものとは異なり、明瞭な玉縁状口縁を呈するものなどを確認できたことから、これが本遺跡群内での遺構間の差を表すのか、あるいは時期的な差異を示しているのかは今後検討していく必要があるだろう。また、従来の提示資料より口径が大きく器壁が薄い壺が多数みられるなど、今後発掘調査や遺物整理作業が進むにあたり、さらに多くの器種が確認できるようになることが期待される。

上記①～③の本発掘調査における結果を受けて、今後はN1塔中央テラス周辺部における過去の調査結果とこれからの新規発掘調査成果を整理していく必要があるだろう。

謝辞

本稿をまとめるに当たり、以下の諸機関・個人にお世話になった。記して謝意を表したい。

日本財団、早稲田大学考古学研究室、早稲田大学建築史研究室、石塚充雅、National Sambor Prei Kuk Authority, Ministry of Culture and Fine Arts, Department of Culture and Fine Arts in Kampong Thom

註

- (1) サンボー・プレイ・クックの都市区域は、慣用的には都城区と称されている。しかし、都城とは社稷・天壇・地壇等の古代における王権思想に裏打ちされた明確な都市構造をもつ、中国の中原に端を発する思想空間のことを意味する。クメールの都市は、こうした中国都城とは構造が異なり、また中国都城を模した渤海や日本の都城とも異なる。概念の混同を避けるため、本稿では都市、都市区域の語を用いることとする。
- (2) 下田他(2006)では「異なる煉瓦敷きパターン」と報告されている。本稿ではこれを「下部煉瓦敷き」とする。
- (3) 嶋本(2009)によれば、精製土器は「良質の胎土を用いて器壁が比較的薄い」もので、「丁寧に調整を行った後に一部には彩文を施して装飾する特徴を有する」。器種は、壺、注口土器、鉢が挙げられる。一方で粗製土器は「精製土器と比較して粗い胎土を使用」しており、「装飾に彩文を用いず、刻文を施す」。器種は鉢、中・大型壺といった炊事・運搬・貯蔵に適した器形が主となる。

文献一覧

Groslier, Bernard. P.

1981 Introduction to the Ceramic Wares of Angkor. In Diana Stock (ed.), *Khmer Ceramics 9th-14th Century*, Singapore, Oriental Ceramics Society.

Nagumo Naoko, Sugai Toshihiko, Kubo Sumiko

2011 Characteristics of Fluvial Lowland in Lower Reach of the Stung Sen River, Central Cambodia. 『地形』第32巻第2号: 142-151

グロリエ, ベルナル (津田武徳訳)

1998 「アンコール王朝陶磁入門 9世紀から15世紀初め」『東南アジア考古学』第18号: 167-212

古城泰, 久保純子

2003 「カンボジア中部、ソンボープレイクック遺跡(7世紀)の調査: 1998・1999年度調査より」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』13: 15-31

嶋本紗枝

2007 「カンボジア・チェイ村における発掘調査と出土土器について」『東南アジア考古学』27号: 71-84

2009 『サンボー・プレイ・クック遺跡群の土器と考古学資料から見る遺跡群の年代』早稲田大学提出修士論文

嶋本紗枝, チュン・メンホン

2008 「古代都市イーシャナブラにおける表探調査の成果について」『遡航』第26号: 59-74

嶋本紗枝, 山本信夫, 中川武

2008 「サンボー・プレイ・クック遺跡群出土土器・陶磁器の年代についての考察—B. P. グロリエによる発掘調査出土遺物を資料として—」『東南アジア考古学』28号: 47-60

下田一太

2010 「クメール古代都市イーシャナブラの研究」早稲田大学提出学位請求論文

下田一太, チャン・ピタロン, セン・コンベアック, ヒム・ソフォン

2008 「サンボー・プレイ・クック遺跡群ブラサート・サンボーの復元研究—2006シーズンの発掘調査をもとに—」『東南アジア考古学』28号

下田一太, ヒム・ソフォン, セン・コンベアック, チャン・ピタロン, チュン・メンホン, ソ・ソクンテリー, 中川武

2006 「サンボー・プレイ・クック遺跡群ブラサート・サンボーにおける発掘調査(2004-2005シーズン)」『東南アジア考古学』26号: 117-145

菅澤由希

2014 「クメール古代都市サンボー・プレイ・クック遺跡群の都城区における基礎調査—考古学的価値付けおよび埋蔵文化財保護に向けて—」2014年筑波大学提出修士論文

近森正

1967 「カンボジアにおける最近の考古学活動」『月刊 考古学ジャーナル』15：17-19

チュン・メンホン

2015 「クメール古代都城址イーシャーシャナプラの基本構造の形成と変遷に関する研究」早稲田大学提出学位請求論文